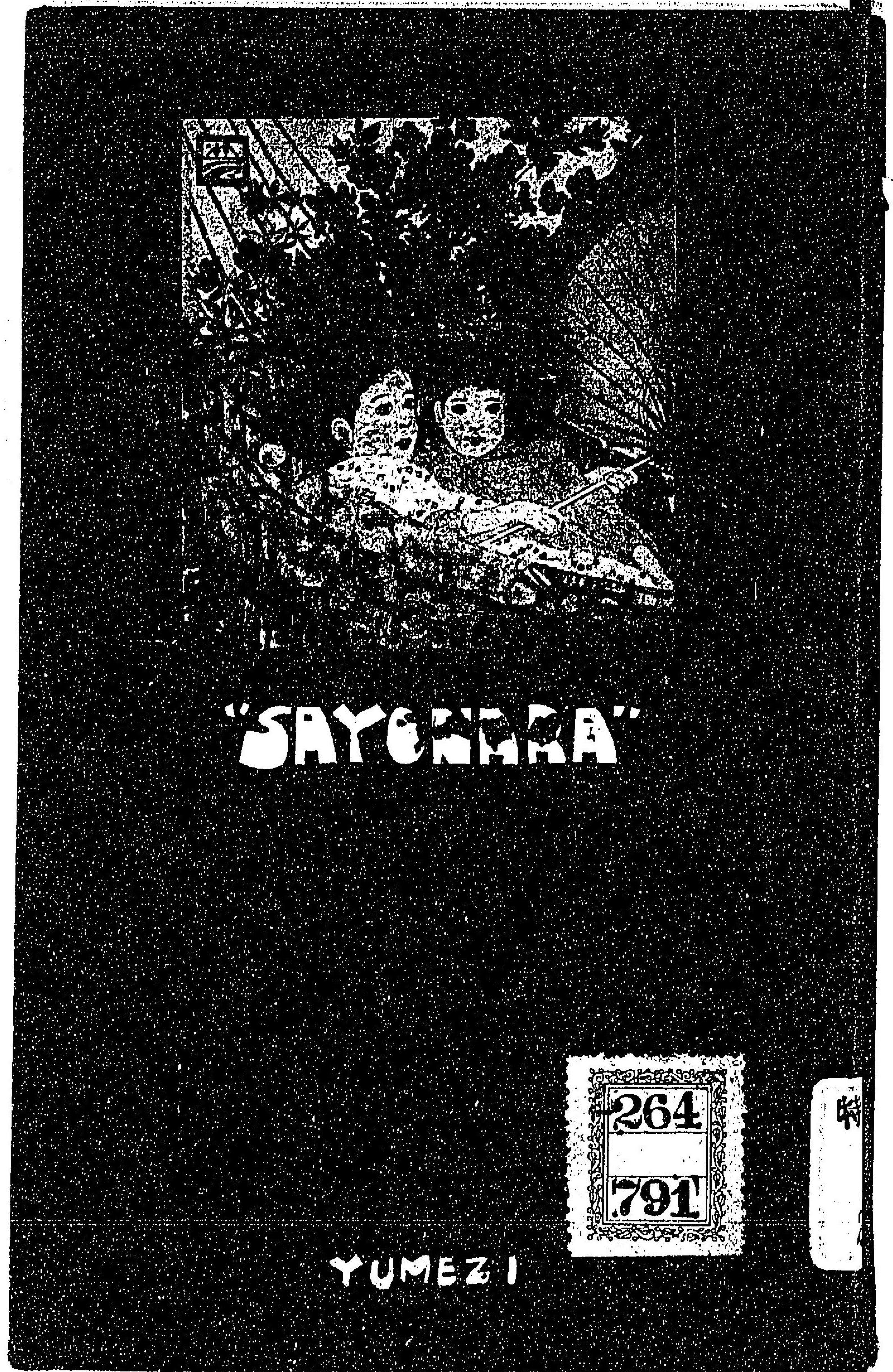


093870-000-2

特13-243

さよなら

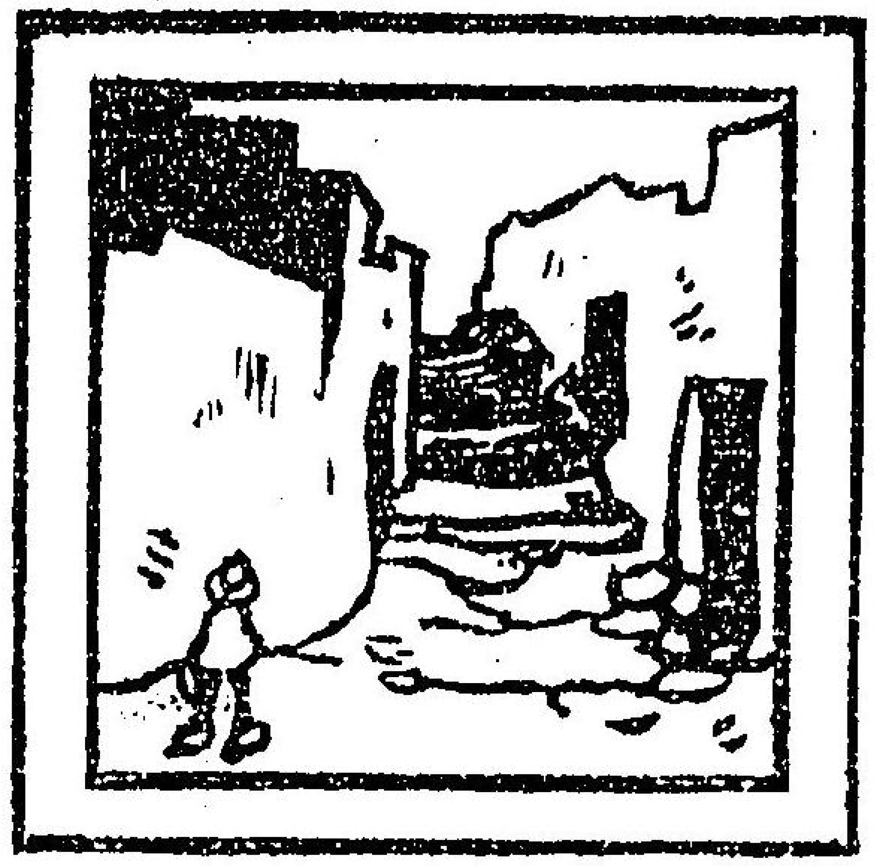
竹久　夢二／著

M43

DBQ-1303

明治[illegible]收藏

特13
243



さよなら

夢二

明治
44. 3. 28
内交

To

紅の花の如く咲き出でたる
少年の日の物語なれば、
われには懐かし。
されど、小鳥の如く自由なりし
少年の幻影に別るゝ紀念なれば、
いと悲しも。
別れゆく、いぢらしき後姿よ。
さよふなら。

—流離の野にて—夢二—

"SAYONARA"

目次

少年と春 一
ロンドンへ 五一
はじめて學校へ往つた日 五三
最初の奇蹟 五九
校外の微笑 六一
ちいさな秘密 八七
盲目の少女 九八
子供の世界より 一〇三
クリスマスの夕 一〇五
月見草の歌 一四五
さよなら 一四七

[illegible]

少年と春

I

『い』とあなたがいふと、
『それから』と母様は仰言つた。
『ろ』
『それから』
『は』

あなたは母様の膝に抱つこされて居た。戸外では凩が恐ろしく吼へ狂ふので地上にありとあらゆる草も木も悲しげに泣き叫むでゐる。その時、あなたは慄えながら、母様の頸へ、しつかりと、しがみつくのでした。

凩が凄じく吼へ狂ふほどに、洋燈の光が明るくなつて、卓の上の林檎はいよ〳〵紅く、暖爐の火はだん〳〵暖かくなつた。

あなたの膝の上には繪本がおかれ、悲しい悲

しい話のところが開かれてあつた。それを母様は讀んで下さる。——それはもう前に百遍も讀んで下すつた物語だつた——その時の母様の顔色は沈んで、聲は低く悲しかつた、あなたは呼吸をころして一心に聽き入るのでした。

『誰そ、駒鳥を殺せしは？』

雀はいひぬ、『我こそ！』と、

『わがこの弓と矢とをもて、

我れ駒鳥を殺しけり』

これがあなたの虐殺者といふものを聞き知つた最初であつた。

あなたはこの恐ろしい光景を殘りなく胸に描き得た——この憎むべき矢に射貫かれた美しい暖かい紅の胸を！　この刺客の手に殪れた憐れな柔かい小鳥の骸を!!

咽喉が急に塞がつて、涙があなたの眼に浮ぶ一滴又一滴、それが頰を傳つて流れては、熱い而も悲しい滴りが、繪本の上に雨のやうに落ち

た。

『母様！　駒鳥は可哀そうねえ』

『おゝ、おゝ、坊や、泣くんぢやないよ』

『でも母様、…………雀が……雀が……こ……殺しちやつたんだもの』

『あゝ…………左樣なの。雀が殺して仕舞つたのよ。本には左樣書いてありますけれど、けれども…………坊やは聞たことがありますか？』

『…………何あに？』

繪本は、その悲しい話の半面を語つたに過ぎなかつた。他の半面は母樣が知つて居なさつた。駒鳥は殺された、殺されて冷たい血汐の中に横はつたことは事實であつた。けれども慈悲深い、死の翼あるその矢のために、駒鳥は正直な鳥の常に行くべき處へ行つた。そして其處で——あゝ嬉しい——彼は、先へ行つて居た自分の最愛の妻と子にそこで逢つたことでした。

『駒鳥の親子は、今はみんな其處に居るんですよ。この世に住んだうちでは、一番しあはせな駒鳥なんだよ』と母樣は、あなたの涙に濡れた頬にキスしながら仰言つた。

大きく見ひらいたあなたの眼には、もう涙は消えて居た。あなたは、正直な鳥の行くべき處に居る駒鳥のことを遠く思ひやつた。駒鳥の眼、駒鳥の紅い胸は再び輝いて居た。彼は囀り、歌ひ、そして妻子を連れて枝から枝へ飛び移つた。

小さい話を繕ふことも、小さき人の心を繕ふ

ことも、小さい靴下を繕ふことのやうに、母様は實にお手に入つたものでした。

こんな時にはいつも、あなたの靴下からは膝小僧が覗いて居た。日の暮れには、きまつて靴下に穴があいて、そこから泥だらけな膝が見えるのでした。

『まあ御覧！ちよつと御覧なさい！　たつた今なほしてあげたばかりぢやありませんか』といつて、母様はあなたがお眠るまへに、湯殿へ連

れておいでなさる。あなたは大きな盥の縁に腰かけて、脚で水をポチャ／＼いはせながら母様の横顔を見てゐた。

『まあ汚い兒だねえ』と仰言つて母様はあなたの生傷のついてる眞黒な膝を洗つておやりになる。そして奇麗になつたところで、いつでもこういひなさる。

『まあうちの灮る兒！』

そして、あなたの靴下は、あなたが朝にお家

を飛び出す時にはいくら綺麗であつても、夕方またお家へ歸つて來る時には、もう見る影もなく汚れて居るのでした。そこで例によつて、それ糸巻はどこにある？　糸は？　針は？　といふ騒ぎが始まるのです。

　夏の朝、母様は庭の離れでお針箱を側へ置いて縫物をなさるのが常だつた。太陽は、網の目のやうになつて居る木々の緑を透して、金色の光を投げた。鳥も囀りに倦き、風もまどろむお

八つの時にも母様はなほ止めず針を動かしておいでだつた。

　日が暮れてお夕餉が濟むでも尚ほ母様は、黄色い洋燈の光の下に、針を動かしておいでだつた。

『母様なぜそんなにチク〳〵ばかりしてるの？』

『坊やには青い水兵服と、嬢には紫のお被布を拵へてあげやうと思つてサ』

『母様は、チク〳〵が好きなの？』

『左様とも思はないけれど――』

『だつて……母様は飽きないの？』
『あゝ、時には』
『ぢやお休みなさいよ。ねえ母様！』
『お休みッて？　坊や。あゝ、休みましよう。いま少し縫つて――いま少しネ――そしたら遊びましよう』
『だつて、母様は、いま少し、いま少しッて、一日かゝちまうんだもの、ねえ、母様てば、母様』

あなたは少し考へて、
『もう縫はなくつてもいゝのよ』
『もういゝッて？　この兒は！』と母様は笑つた。あなたも笑つた。
後にあなたは、
『母様とは私の面倒を見て下さつて、私を可愛がつて、そして、いま少し、もう少しッて――終日――縫物をして居る人です』
と人々に話してきかせたのでした。

そうすると、その人達は、母様が小供達の面倒を見て下さるからには、小供達も亦母様の爲にしてあげなければなりませんと、あなたに話しました。そして、あなたは實にその言葉の通りに行つた。

　母様の前に立塞つて、あなたは勇ましく拳を握り占めた。

『私の母様に觸つちやいけません！』

　あなたの唇はわなゝき、眼は怒と涙で輝いて

居た。

　けれども、母様はあなたをかばいながら、

『父様は、串談なんですよ』母様はあなたを胸に抱きよせて、

『御覧よ、父様は笑つてらつしやるよ』と仰言つた。

　父様は、

『やーい、小わつぱ！　父様は串談でやつてるんだよ』

母様は、ほゝゑみ乍ら、しかも傲りがにあなたの涙を拭つておやりになつた。あなたは、あなたの方へ手を差出して居る父様を、いぶかしげに見やつた。そして母様に押されながら、おづ〳〵と父様のところへ行つた。
父様は仰言つた。
『お前はいつでも今のやうに、母様に盡さなければいけません。そして父樣が居ない時には、誰れでも他處の人に、母様がいぢめられないよ

ふにするんですよ』
母様は、あなたの額にキスして、
『母様を護る軍人なのだもの』
そしてこれから以後は、あなたが近くに居る時には母様には心配はなかつた。
『あゝ、あの荒木の奥さん、あれには又弱つて仕舞ふねえ』と母様は、微に仰言つたけれど、あなたはそれを聞き逃さなかつた。そして小さき全精神を擧げて荒木夫人を憎むだ。

遂にその奥さんの勘定日が來て、奥さん自身やつて來た。

母樣は庭に居て聞きつけなかつた。あなたは自分で挨拶に出た。

『母樣には、今日は、逢えやしないよ』あなたがしやちこばつていふと、

『それは變ですねえ』と荒木夫人は一足進むで言つた。

『駄目だい！』あなたは、力一杯に障子につかまつて、聲を張り上げた。

『駄目だよ。這入つちやいけないよ！』

『おせつかいだつちやありやしない！』荒木夫人は、嚇しつけるやうにいつたけれど、あなたは、めげずに睨みつけて、再び聲を張りあげ、

『もう〳〵、僕の母樣にや逢へやしないよ』と斷乎として繰かへした。

『何故ですか？承はりたいものですが』と荒木夫人はみる〳〵ふくれ上つた。

『一体如何してなのです？　それを聞きましよう』

『何故ッて、父様が居ない時には母様の面倒を坊やが見て上げるんだい。母様が逢ひたくないやうな奴に母様がいぢめられないやうにしろッて父様が言つたんだもの』

文句が長かつたので、一息でいつて仕舞ふのは大低の事ではなかつた。

荒木夫人は、干からびたやうな嘲笑を洩らし

て、

『あゝそういふんですか？　それでお前さんは、何故お前さんのお母様が私に逢ひたくないのか、その譯を知つてますか――え？』

『だつて――母様――左様言つたもの！』

あなたの言つたことはきれ〴〵で、恰度『いろは』の御本を讀むやうだつたので、荒木夫人は呑込めなかつたかもしれなかつた。

しかし兎に角、うまく行つた。荒木夫人は火

のやうに怒つて、鼻息を荒くしながら、裾を蹴返して歸つて行つた。

『もう決して〳〵』と言つて、門の戸をピシャリと閉めた。あなたは靜かにドアをたてた。

戰は勝てり!!

あなたは庭へ引返した。

『もう濟んだ、もう濟んぢやつた』

『もう濟んだつて?何がさ?坊や!』

『荒木の奧さん!』とあなたは答へた。

かくの如くあなたは母様に盡した。母様は益々あなたを可愛がり、あなたも益々母様に盡したのでした。

この日頃あなたは、病氣ではあつたもの丶、猶且機嫌がよかつた、何故つて、母様がおいしい物を拵えては、お茶碗に散蓮花を添へて持つて來て下さるたんびに、お代りのいる程食べたんだもの——死なゝいつて證據のやうに。

そうしては、柔かい枕をして、母樣が手づか

ら拵へたツギハギだらけの丹襌を掛けて横になつた。

枕頭には母樣が嫁入りの時に着たキモノの絹の小さなキレや、母樣が、ずつと昔、まだ桃割を結つてた時分の、他處行のお羽織の紺青色のキレがあつた。まだ／＼お祖母さんのキモノの柔い鼠色のキレや、春さんのゝであつたピカピカ光る桃色のゝや、父樣が若かつた男盛りの頃のネクタイだつた條のあるのや、藍色のゝや、

黄色いのなんかもあつた。

病に疲かれてものうく。眠む氣がさして、うつとりとして來るにつれて、その嫁入衣裳のキレは、冷たい眞白な雪に變はる。

すると橇の鈴の音が聞えて來る。

隈ッこの方に小さな敎會のついて居るクリスマスカードが見える。その敎會の塔は氷つて居たけれど、その窓はクリスマスの輝きで明るく暖かゝつた。

次に紺青色のとは空だつた。

そして、それを見て居ると、小鳥や、星や、三月彌生のことなどが、思ひ出されるのであつた。

若し祖母樣のゝであつた鼠色のキレに眼を移すならば、綠色だつた空は忽ち暗くなつて雨が降て來る。

けれどもお春さんのゝであつた桃色のキレや、父樣のだつた藍色のゝや黄色のを見さへすれば、

直ぐに花が咲いて、お日樣がまた輝やくのでした。

やがていろんな色がごつちやになつてこんがらがつて仕舞ふ。蒲公英がチャラ〳〵と鳴つたり、橇の鈴や菫が雪の中で花をひらいたり。そしてあなたは眠るのです――この眠り。これが小な小供を健康にするのです。

II

春が來た。

櫻の枝には蜂と風とが音を立てゝ居る。庭にはあなたと母樣と二人きり、白い花瓣が雪のよふに音もなく散りかゝる。小鳥は朝の輝きのうちに囀つてゐた。

あなたは躍り、笑ひ、且、歌つた。

あなたの大きくみひらひた眼には、果てなき

大空の藍色と、見渡す草原の緑とが映り。紅を潮した頰には、日の光とそよ風とが知られた。

あなたの浪打つ胸には少年と春と——未だいたいげな子供に向つて、少年といつては餘りに大に過ぎ、春といつては餘りに大に過ぎるけれど…………。

『母樣、見て御覧なさい。坊やが飛び上りますよ』

『まあ！』

『今度は逆立ち――』
『まあ、お上手』
『母様、坊やは成長くなつてから、何になるか
知つてますよ』
『何になるの？』
『曲馬師になるの！』
『いゝねえ、それは』
『大きな白い馬に乗つて、ねえ母様』
『まあいゝことねえ』

『そしてお月様なんか飛び越しッちまふんだ』
『お月様を！、まあ』、
『えゝ、お月様を御覧なさいよ！』
と言つて、あなたはそとにあつた熊手の柄を
飛び越えた。
お月様を飛び越す下稽古でした。
『けども坊やは曲馬師にはならないかも知れな
いよ。屹度、ねえ母様』
『ならないつて？』

『坊――僕は、ジヨーヂ、ワシントンのやうに大統領になるの、父様がなれるつていひましたもの、なれるでしようか、え、母様』
『左様――なれましようよ――何時か』
『けども次郎坊なんかなれやしませんね母様』
『何故、次郎さんはなれないの？』
『だつて次郎坊は約束しても直ぐ嘘言ふんだもの、坊は言はないの、ジヨーヂ、ワシントンも言はなかつたの。屹度、もう曲馬師にはならな

いつもりなの』
『左様々々、その方がいゝんですよ。曲馬師と大統領とはまるで較べ物になりません』
『坊やは、僕は、母様、僕はきつと大統領になりますよ』
『まあいゝこと、屹度なるんですよ』
母様は離室で縫物を初めなさる、お針箱を側へ置いて………。
『母様』

『はい』
『今から歌を歌ひますからねえ母様』
程よい庭へ眞直に立ち、踵を揃へ、兩手を眞直に垂れて『氣を付け』の姿勢であなたは歌ひはじめた。
『天はゆるさじ良民の、
自由をなみする虐政を、
十三州の血はほとばしり』
『もう少し靜かにお歌ひなさいよ』と母様が仰

言つた。
『天はゆるさじ良民の……』
『それぢやあ聞こえやしない、あんまり聲が小さ過ぎるもの』と母様が笑つた。あなたは一寸と妙な笑方をして、また聲を張りあげる。
『自由をなみする虐政を
十三州の血はほとばしり
こゝに立ちたるワシントン』
『まあお上手だねえ』と母様、

『さあ今度は母樣の番だよ。母樣、何かお噺！』
『お噺？』
『えゝ、あの菫のお噺』
『菫の？』といつて母樣は、夢見るやうに針の手をとめて、
『青い〳〵菫が――』
『空のやうに青いのねえ。母樣』とあなたは物柔かに言つた。
『空のやうに青い、左樣。昔はね、この世界に

菫が一も無かつたの』
『それからお星樣もねえ。母樣』
『えゝ、菫もお星樣もこの世界にはなかつたの。そこでねえ坊や、青ーい〳〵空を少しばかり分けて貰つて、それを世界中に輝かしたものがあるの。
それが菫の一番はじまりなんだよ』
『それからお星樣は？』
『坊やは知つてるぢやありませんか。お星樣は

ね。青い空の小さな穴ですよ、それから天の光が輝やいてる小さな穴ですよ』

『ほんとう！、母様！』とあなたは靜かに言つて、母様を視た。

母様の眼は菫のやうに青く、星のやうに輝いて居た、天の光が輝いて居つたので。

母様は世界中で一番不思議な人であつた。

母様は嘗て惡い事をしたことがなかつた。そしていろんな事を知つて居た。夜も晝も子供のこ

とを見ておいでなさる神様をも知つて居た。また神様はあなたの髪の毛の數さへも知つておいでなさるのみならず、小鳥が死ぬのをも、一羽だつても神様の知つて居なさらぬことはないと、母様は話してきかせなされた。

『そんならねえ母様、神様は、あの駒鳥の死んだ時をも知つて居なさるでしようか』

『知つてなさるとも』

『それぢやあ、坊が指を傷めた時をも、知つて

ゐなさるの？』
『あゝ、何でも知つて居なさいますよ』
『そんなら、坊が指を傷めた時には、可愛さうと思つたでしようか。え母樣』
『それは、可哀さうだと思ひなされたともね』
『ぢや、何故神樣は坊やの指を傷めるやうになさつたの？何故母樣』
暫らく母樣は默つておいでだつた。
『まあ坊やは！　それは母樣には解らないの。

神樣より外には誰も知らないことが澤山あるんだから』
靜かにあなたは母樣の言葉を怪しみながら、母樣の膝のうへに抱かれて居た。
空のどこかに、雲のうへの輝き渡る大きなお宮の中に、金の冠を戴いて神樣がいらつしやることをあなたは知つて居た。そしてその下の綠の世界には、小鳥が死んだり、小さな小供が指を傷めて、母樣に抱かれて泣いたりするのです。

神様はすべての事、すべての人を視ていらつしやつた、けれどもそれを助けはなさらなかつた。

あなたは母様の頸に兩手をまはして、母様の胸に噛りついた。

『母様！　坊は神様はいや！　神様はいや！』

『何故坊やはそんな事いふの？――神様は坊やを可愛がつてらしやるのに、まあ』

『だつて、だつて、母様！――母様がなさるよ

ふぢやないもの！　神様は母様のよふぢやないんだもの!!』

蜂と風とは林檎の枝に音を立てゝ居た。もう五月になつたのだ。庭にはあなたと母様と只二人、眞白な花びらが雪のやうに亂れて散る。

あなたは祖父様が拵へて下すつたブランコに乘つた。青葉の影はそよ風につれて搖れる。あ

なたの心はあなたの夢みるまゝに搖れた。風は林檎の枝に歌ひ。花たわゝなる枝は風に搖れ、風に撓つた。

あなたの頭上はすべてこれ空飛ぶ鳥と、鳥の歌。あなたの周圍はすべてこれ風に光る草の原であつた。

あなたはブランコの搖れるがまゝに、何時とは知らず、藍色のキモノに身を包むで、藍色の大海原を帆走る一個の船夫となつて居た。

風は帆綱に鳴り、白帆は十分風を孕むだ。船は閃く飛沫を飛ばして駛せた。鷗は鳴いて大空に輪を描いた――かくしてあなたは海の風に髪をなぶらせつゝ、何處までもと、ひた駛せに駛せた。

船は錨を下ろした。

動搖は止んだ。

あなたはもとの子供であつた。

『母樣』

と夢心地であなたは靜に言つた。聲はまだ眠そうだつた、母樣は聞きつけなかつた。母樣は矢張り離で笑ひながら坐つておいでなさつた。針の手は鈍つて、縫物が膝から辷り落ちそうであつた。

　あなたの母樣は世界中で一番優しい人、あなたはその母樣の秘藏ッ子であつたことを、今こそ知つては居るものゝ、あなたはその時まだそれを知らなかつた。

　母樣の庭で、母樣の膝の上で、母樣の手に抱かれて、母樣の頬にあなたは兩手をあてながら、母樣の眼の藍色の床しさをあやしみつゝ凝視めた。そして情あふるゝ母樣の聲を嬉しくきいた。

『可愛いゝ坊や』

『え』

『私の大切な〳〵可愛いゝ坊や』

　といつて母樣はあなたを胸に抱き寄せて、頬ずりをなさる。

『何日かねえ、このお庭で、この離室で、母様は坊やの夢を見たのよ』
『坊やの夢を？ えッ母様』
『あゝ、坊やの。 恰度此庭でね、そこの月見草が花盛りで鳥が鳴いて居たの。
母様は坊やが小さな赤ん坊だつたところを夢に見たの。 あゝその時に風は月見草の花に歌をうたつてきかせて居たわ。 母様はねえ。 坊やにねんねこ歌を歌つてきかせたのよ。

そうするとねえ坊やが私の方へ手を伸べて笑つたの、それから……ねえ、坊や……』
『でも母様、それは夢だつたの』
『それはほんとの夢だつたの……左様たわ……けどもそれが眞實になつたの。
それは六月のある晩にねえ。 眞實になつたの——六月のおついたちに……』
『坊の誕生日に？』
『坊やの誕生日に!!』

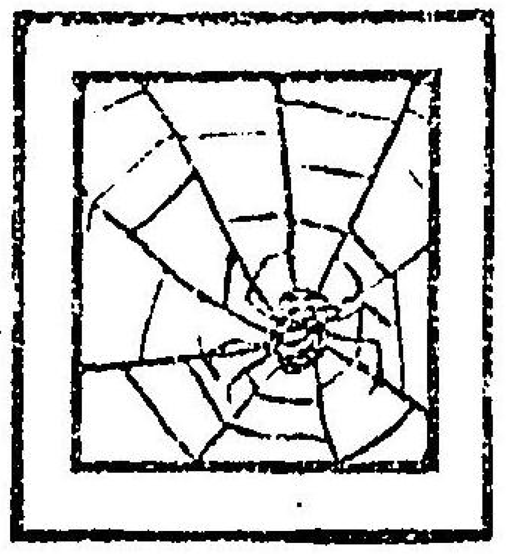
息をもつかずあなたは言つた。
『母様！　まあなんて美しい夢でしょう‼』

ロンドンへ

『可愛い猫よ、クロさんよ。
おまへは何處へ往つてきた？』
『野越え山越へロンドンへ。
女王に逢ひに往つてきた』
『可愛い猫よクロさんよ。

『おまへは其處で何をした?』

『女王の椅子に腰かけた。
すると下からひよつこりと。
鼠が出たので驚いた』



初めて學校へ往つた日

『さあ〳〵學校へいつていらつしやい、ママさんは不二坊が歸つてくるのを待つてますよ』とママが仰言つた。

ちいさな御本と、おいしひ物が澤山はいつてゐるお辨當を戴いてお家を出かけました。

すこしゆきますと、猫に出逢ひました。
不二坊はたれも一緒にゆく兒供がないので淋しくて仕樣がないところなので猫にこう尋ねました。
『猫や、あたいと一緒に學校へゆかないの？』
猫は、にやを〳〵と言つたきり、いつてしまひました。
それからまたすこしゆきますと、犬に逢ひました。

『おまへは、あたひと學校へいかないかい？』ときゝましたけれど、犬は唯わん〳〵と言つて走つていつて仕舞ひました。
つぎに、不二坊は一疋の牛に逢ひました。
『あたひと一所に學校へいかない？』と聞きました。けれど牛はたゞもう〳〵と言つたゞけで草を喰べてゐました。
スミレの咲いた坂の所へ來ると、赤い帽子をきたちいさな女の子に逢ひました。それは不二

坊の從妹の美ちやんでした。
『美ちやんどこへゆくの？』
ときゝますと、美ちやんは御本の包を不二坊に見せて、
『學校へゆくんだわ』
と言ひました。
『あたひも學校へゆくのだよ。そんなら、一緒にゆこうよ。ね』
『えゝ、もう急いでゆかなくちやいけないわ。

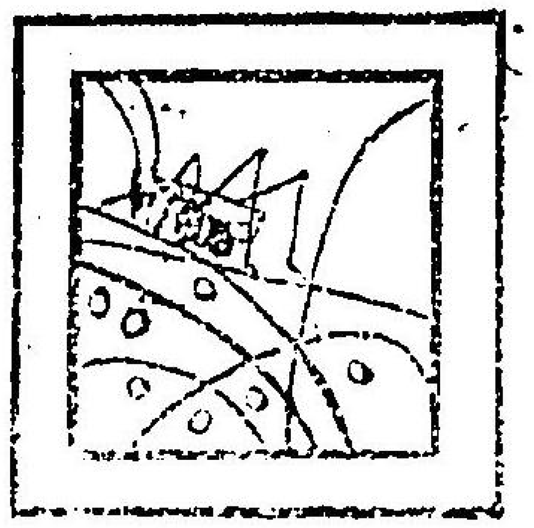
『不二さんは鐘がなつたの聞かなくつて？……不二さんのお辨當には何があつて？』
『卵燒サ！』
と不二坊は威張つて答へました。
暫くたつて、二人は學校へつきました。
先生は、二人の名を呼びました。
二人はそこで……ア、イ、ウ、エ、オ……を習ひました。

最初の奇蹟

あたひ、もうすぐ學校へ行くんだわ。
そしたら、鉛筆を買つていたゞいて、
紙へ字をかくんだわ、繪もかくわ。
あたひ、姉さんのいふやうな事なら、
今だつて言へてよ。
二に二足して四！

それから、四に四足して八！
まだ言へるわ、
八より四減いて四殘る。　ね！
それから、四より八減いて――あら!!
待つて頂戴――數へて見るわ。
四より八減いて――あら！
あら、あら、わからなひわ、
ほんとに、幾つ殘るんだらう？

校外の微笑



生徒が教場で先生の眼をのがれるには、地理の大きな附圖は、まことに都合の好いものでした。小さな女生徒は、この大きな附圖の蔭にかくれながら、恰度お家にゐるやうな氣になつて、いろんな徒書をすることが出來る。

或日の地理の時間でした。女教師の江川先生は、教壇に立つてずつと教場を見まはした。江川先生は附圖の蔭にかくれて何か徒書をしてゐた一人の女生徒を目附けた。

『夕美子さん、あなたは何を書いてゐます。それをこゝへ持つていらつしやい』

江川先生が仰言つた。

ほかの生徒等はみんな勉強をやめて夕美子の方を見た。まあよかつた、自分達が先生に目つ

けられたのであつたならと思つた。互に眼を見合はして囁きはじめた、夕美子は、ノートを先生のまへへ差出した。

江川先生は、夕美子の持つて來たノートを、靜かに口のうちでお讀みになつた。

ノートには

……ワタシハ江川先生がスキデス……

と書いてあつた。

先生たるものは、次の休憩時間まで微笑を忍

ばねばならなかつた。
江川先生はまじめにそして嚴格にかう仰つた、
『これは私が預つておきます。もう、席へおつきなさい』
夕美子は、今しづかに自分の席へついて先生の方を見た、先生は決して夕美子の方は見なかつた。
やがて授業時間が濟むのを待ちかねて、生徒等は學校を出てみんなお母樣の許へ歸つて往つた。
たゞひとり夕美子は敎場に殘つてみんながゐなくなるのを待つた。みんなが門の外へ出てしまつた頃を見すまして、黑板へかう書いた。
……江川先生は美クシクテ、ソシテ好イ方デス……
と、窓の外で足音がした。夕美子はふるえながら書くのを止めた。そして爪先で歩いて外へ出た、敎場を出たけれど胸の動悸はやまなかつ

た。
翌朝、夕美子が教室へ入つて見ると、ボールドの字は消されてゐた。

江川先生は少しも夕美子の方を見なかつた。

夕美子は、それが氣がゝりでならなかつた。先生は私のことを怒つていらつしやるかしら？先生は黑板に書いたのをごらんになつたらうか？先生はそれを氣にかけていらつしやるんだらうか？

夕美子は先生の一擧一動を、注意深く見つめた。

先生はもう二度と私を見ないのだらうか？もう〳〵一生見ないのだらうか？

一時間また一時間と授業は過ぎたけれど、なほ、先生は夕美子を見なかつた。先生は他の生徒を見ては微笑むで居られた。

夕美子は、悲しくなつて机の上に俯伏して仕舞つた。もし私が病氣になつて、死んで、そし

て先生を呼びにやつたら、その時には、先生は來て下さるだらうか、それとも私になど構つて下さらないだらうか？

次の地理の時間は來た。

夕美子も本を出した。

先生が夕美子に質問するとき夕美子の方を御覽になつたろうか？

それとも『富士山はどこの國にありますか』と聞く時にも、先生はやつぱり向をむいて仰言

つたろうか。

いゝえ、先生は眞直ぐに夕美子の方を見て、

『夕美子さん、フランスの都は何と言ひますか』と質問なさつた。夢ぢやあるまいかと、夕美子はよろこんで勇しく立ちあがつた。先生の顔を見あげて、

『それはパリーであります』と答へた。

先生は

『さうであります』と仰言つた。そしてまあ夕

美子の顔を見て、ニッコリとお笑ひなすつた。

その翌朝、夕美子はいつになく早く眼をさました。寢衣のまゝお庭に下りた。花壇の中へそつと入つていつて、薔薇の花を持ちきれないほど摘みました。

『まあそんなに花を摘むでどうするのです』

とお母樣がお叱りなさつた。

子供の心は、往々、母親にさへ解らぬことがある。

その日、先生は『貧しき人』についてお話しなさつた。

夕美子はどうかして貧しい人を見出して、自分の持つてゐるものをみんな與つたらば、先生は屹度私を可愛つて下さるだらうと考へた。

學校から歸る路々も夕美子は貧しい人のことばかり考へてゐた。

その時、夕美子のまへを一人の知らない女生徒が歩いてゆく――あゝ。どうぞあれが貧し

い兒であつて呉れゝば好いに――。
　夕美子は駈けていつて追ひついた。女の兒の提げてゐた、オリーヴ色に赤い字を編みこんだお辨當袋がまづ目をひいた。
『お母さんが、それ拵へて下すつたの？』と夕美子が尋ねた。
『お母さんは無いの、叔母さんが何でも拵へて下さるわ』とその子は答へた。
『それぢあ、あなたは孤兒なのねえ、さうぢやなくつて？』夕美子は熱心にきいた。あゝ、どうぞこの女の子が孤兒でさへあつたなら？
『左様なの』とその子は答へた。
　夕美子は半ばうれしさに、
『まあよかッ………それから、あなたは貧乏なの？』
『いゝえ、貧乏ぢあないわ』氣に障つたやうな答であつた。
『まあ、御免なさいな。私、貧しい子があつた

らよくしてあげやうとおもつて、それぱかり探してゐた所ですの』

夕美子は、江川先生のことについて殘らずこの女の子にうちあけて話した。女の子は非常に同情して、いろ〳〵とそのことについて考へて呉れた。ともかくも明日學校へゆく時、江川先生と一緒にゆくことにして、その日はそれで別れた。

別れる時、『私の名は山川春子つていふのよ』

と言つた。

翌朝になつた。

二人は先生の後について學校へ往つた。けれど先生と一緒には歩かなかつた。

休みの時間に、二人は他の生徒から見えない木蔭に座つて、それについていろ〳〵の事を考へた。

江川先生には、お母樣はないのかしらといふことや。先生は、いつお嫁入するんでせうとい

ふことや、もしか先生が死んだら、そのお墓の傍に小さなお家を建てゝ、お家のまわりに花を澤山植えて、二人は何時までもそこに住みませうねえ、といふやうなことなどを語り合ふた。

春子のお家は、先生が通ふ道の近くにあつたものだから、學校の歸りにはきつと先生の側にくつゝいて歩いて往つた。夕美子は、學校の門のところに立つて、先生や春子の歸つてゆく後姿を見送るのであつた。

けれど、先生は春子さんばかりの先生ではない。

その次の日、春子は『今朝、私先生の洋傘を持つて來てあげたのよ』といつた。

そして、その次の日には春子はお家から學校まで先生に手を引かれて來た

夕美子は考へて考へて、考へぬいて、遂に好いことを考へついた。

それは、先生のお家の近所へ引越すことだつ

た。
　でそのことをお母樣にお願ひした。けれどお母樣は許して下さらなかつた。
　その次の日も、春子は先生と一緒に學校へ來た。夕美子は門のところに立つてゐたけれど、春子はそれには目も呉れず、先生の手につかまつてまつすぐに學校の中へ歩いて往つて仕舞つた。
　放課後、夕美子は春子を待つてゐた。春子を

見付けると、
『江川先生はあなたばかりの先生ぢやなくつてよ』と言つて拳を握占めた。
『江川先生はねえ、夕美子さんが大嫌ひだつてさう仰言つたわ』と春子は行過ぎる時に答へた。そして振り返りながら肩越しに、まだかう言つた。
『先生はあなたが憎らしいつて！』
夕美子の拳は靜かに解けて、熱い涙が兩方の

眸から泌み出た。

恰度其日の夕。

江川先生は、微笑みながら櫻木畫伯の手に四枚の紙片を渡した。そしてかう言つた。

『結婚の時には、待女郎がいりますわね。勿論、私は待女郎を私の生徒のうちから選びたいとおもつて居りますのよ。だけどみんな可愛ゆくて、誰にすれば好いか、ほんとに選擇に迷つて仕舞ふんですもの。四人だけ選むで見ましたから、

このうちから名札を引いて下さいましな』

翌朝、江川先生は夕美子を呼むだ。あの時から先生とお話しするのは今日が初めてゞある。

夕美子さん私は來週結婚することになりました。あなた私の待女郎になつて下さいませぬか』と先生はにこやかに、それはそれは優しく仰言つた。

白い衣をきて金の車に乗つて來る天使でさへも、こんなにやさしくはあるまいと思つた。嬉

しい思にみちて口へ出しては何も言へない。默つて頷いて見せた。

　夕美子は、學校が退けてから今日こそは、先生と一緒に歸つた。

　先生は、嬉しい思に忙しくて、自分の側にゐる子供には殆んど話しかけなかつたことに、氣もつかなかつた。

　先生が默つてゐらつしやるゆへ、夕美子の心は、また穩やかでなくなつた。先生はほんとに

私のことを憎らしいつて思つていらつしやるかも知れないわ。屹度、先生はさう思つてゐても顔に出さないのではあるまいかと思ひ惱むだ。

　やがて先生のお家の門の前へ來た。

　先生は、

『さよなら』

と仰言つた。

　夕美子は思切つて

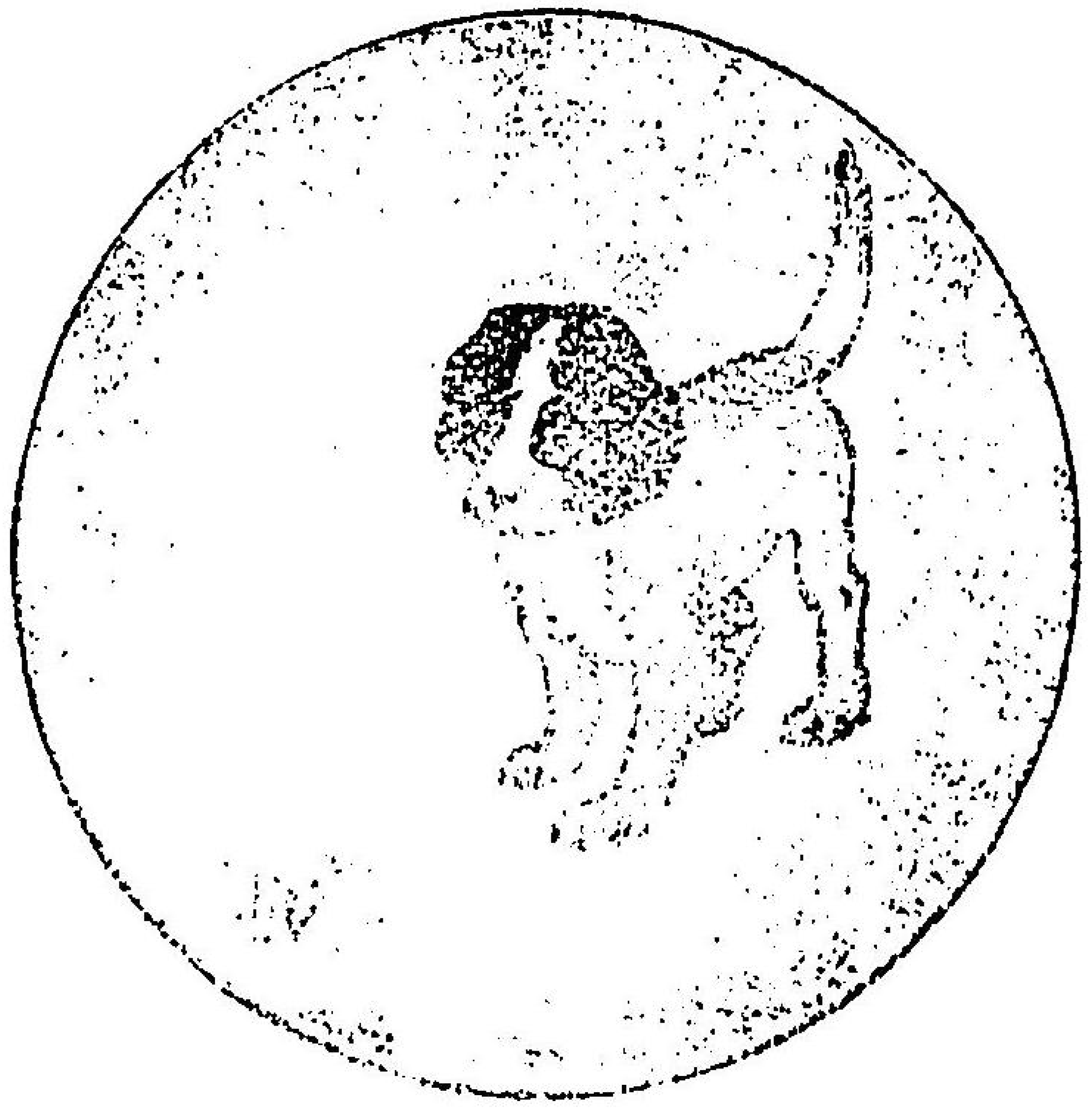
『先生！』と呼むだ。そしてすこし慄へながら、

『先生は私が憎らしいんですか？』ときいた。
その時、先生は『左樣です』と仰言つたらうか？　いゝえ、いゝえ、先生はこぼれるやうなやさしさを怺へて、
『何でまあ……私が、私があなたを憎むで好いものですか……なんて可愛い子なのだらう！』
と仰言つて、夕美子の日にやけた頬に、心からのキッスをなさつた。
『私はどんなにか可愛いとおもつてゐたことで

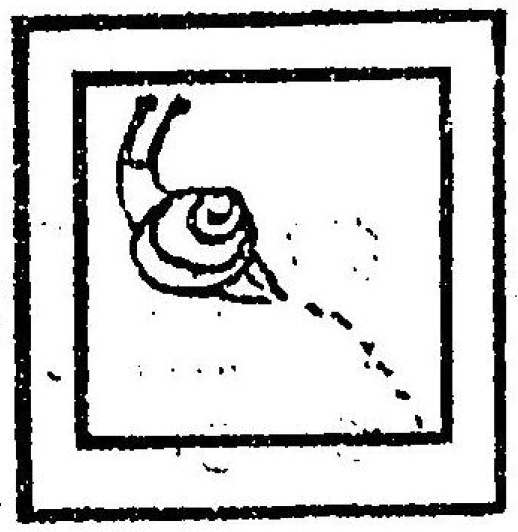
せう　けれど……けれど今はもう學校の外なんだもの』と先生は心のうちで仰言つた。

小さな秘密

小さな犬が街を歩いて居た。
小さな蟻がおなじ街を這ひまわつて居た。
犬はかゝむで蟻の前へ鼻をおッつけた。
蟻も伸び上つて犬を見た。
すぐ話はすむだ。
犬はまたすたこらと歩き出した。



蟻もちよこ〳〵と這ひ出した。
その話を聞たものは晝の星ばかりだつた。



對話

盲目の少女

濱子　十五六歳の少女

小夜子　十四歳位の少女

所は西洋室。室の中ほどにソフアを据え、後の壁には寂しき繪の額を一つ掛け、窓のカーテンは悉く閉ぢ。いづこともなく低く樂の音

聞こゆ。

小夜子は、髮をおさげに結び紅きリボンをつつましく前髮の横に括り。友禪のあらき模樣の被布を着て、素足にスリッパをはき。手を膝のうへに重ね、眼を閉ぢて、靜かにソファに倚り盲目の態をする。

濱子は藍色の服を着け靴を穿つ、髮は根を低く結びたる束髮に結びコバルト色のリボンを後につく。すべて教師といふ態。

濱子。―(懷中時計を取出だし小夜子の膝の上に乘せながら)『小夜子さんこれは何ですか?』

小夜子。(手にて時計を探り)『先生、これは時計であります』

濱子。『左樣、時計です。時計は何にするものですか』

小夜子。『遠い路をゆく旅人が、山を越す時にポッケットから出して、青い月の光りに照らして見るものですわ。』

澤田のお兄様が外國へ往つしやる時でしたわ。神戸の棧橋へ急いで行つたらば、船は蒼い波をわけて小さく見えましたわ。そして澤田のお兄様のお振りになつたハンカチーフがひらひらと鴎のよふに光つたわ。何か仰言つたよふだけれどそれは聞えないで、『アデユウ』といふ悲しい言葉ばかりが聞えるんですもの。私泣いたわ。(遠き昔を思いづる様にていふ)雪やが時計を見送へたんですもの……

物語のお姫様が――――先生私はその譯は知りません。お姫様が悲しいことには王様のお怒に觸れて尼寺へいらしたのです。その夜の二時の鐘の音を合圖に、お姫様は御自害遊ばすことでした。その鐘の音が城下に鳴りわたる同じ時刻に、町はづれの刑場では思人の命が果てることを姫君は御存じでしたつて、先生、時計といふものは悲しいものですわねえ』

濱子。『けれどあなたは七時の時計が鳴ると花の

よふな貴女たちが舞踏室に數知れず咲出る美しさや。クリスマスの夜、サンタクラスに訪ねられる樂しさを知りませぬか』

小夜子。『先生、私にはそれが見えませぬものを』

濱子。（時計を収め、西洋人形を取出して小夜子の膝におく）『小夜子さん此度のは何ですか』

小夜子。（人形を撫でながら、すこし微笑み）『先生、これは人形ですわ』

濱子。『左様、それは人形です。人形には手や足

がありますか？』

小夜子。『やつぱりありますわ、先生』

濱子。『それでは、人間とおなじですか？』

小夜子。『手や足は子供とおなじよふにありますけれど、人のよふにお話も出來なければ、笑つたり泣いたり、子供のよふに鬼ごつこなどは出來ませぬわ』

濱子。『あなたは盲目の兒だけれど何でもよく知つてゐました。そして、人形がどんなキモノ

を着てゐるかわかりますか』

小夜子。（人形のキモノを觸りながら）『柔かな毛織のキモノを着てゐますわ。そしてこの顔の丸るくて滑つこいこと！　どんなにか可愛い顔をしてゐることでせう、先生、私はそれが見えないを悲しく思ひます』

濱子。『紅色のバラの花が夢見てゐるよふなのが頰です。日に輝いた駒鳥のむく毛のよふなのが髮です。そして燕の雛のよふな唇。何か求

めるよふな手をしてゐますよ………』

小夜子。『先生もうよして下さいまし。音樂のないものは私には堪へられませぬわ。それでなければ、何かこう、手の上で動くもの』

濱子。『それでは兎をあげませう。さ、あなたは兎に就いて何か知つてゐることがありますか』

小夜子。『先生、兎の毛は柔かです。そして高い山を走る時のために、短い前脚と長い後脚とがあります。』

濱子。『もう兎に就いて知つてゐることはありませぬか』

小夜子。『丹波の國から來てゐた私の乳母は、牡丹の花のついたチンチコを着せて私をおんぶして呉れましたわ。その乳母が

かち〳〵山の兎は
なんで耳がなあがい
枇杷の葉をたべて
それで耳がなあがい

つて、歌ひ歌ひしてくれましたわ。牡丹の花がほろ〳〵と散ると、それが兎に化けて乳母の白い襟頸のところを飛びまわつてゐましたわ。私も兎といつしよに駈けてゐるよふに、うつら〳〵と夢に入るのでしたわ。

……………暮れりやお寺の鐘が鳴ある…………と唄ふ聲が、だん〳〵と遠く遠くなつていつて、私は兎のことを忘れましたわ。（長い耳ないぢりながら悲しげに）先生、長い耳はこゝにありま

すけれど、私には見えないのですもの…………』
濱子。（さもいぢらしき態にて、小夜子の肩を抱き）可哀そうな盲目の兒よ。兎の毛は純白で、枇杷の葉のよふな耳の下には、木の實のよふな赤い眼があるのよ。そして、まあこの口元の可愛いこと！ 小夜子さん。さ、好いからもう眼をあけて御覧なさい』
小夜子。（眼を見開らきうれしき樣にて）『まあ、先生——ぢやなかつた姉樣！ 私嬉しいわ』

濱子。『ほんとうの盲目ぢやないんだもの！』（樂の音賑かに聽）

[illegible]

子供の世界より

何故お父様は王様にならなかつたの？
何故机の脚には膝がないの？
何故母様は私より大きいの？
何故人形が女の子にならないの？
何故猫は人のよふにして歩かないの？
何故子供に名があるの？

何故私の名はテル坊つていふの？

何故甘しい物を澤山食るとキイ〳〵になるの？

何故林檎は木になるの？

何故ナイフで物が切れるの？

何故日が暮れるの？

クリスマスの夕

人物

母

父

少年の靈

ヴヰオリン

少女等

場所

客間。ピアノ、額、書籍、ヴヰオリンなど見ゆ、すべて質素なるミッション風。カーテンは引かれ、薄い西日が絨氈のうへに流れてゐる。室の中央に玩具や聖日の贈物で枝も重たげなクリスマス木が白蠟の光に輝いてゐる。

人あらず。室外には嵐の吠ゆる音。母入

り來る。黒き裝束にて、手に綻びそめし紅薔薇の鉢を持てり。懐かしき顏。扉を閉づる時扉外を透し見て、うなづき且つ微笑む。扉を閉ぢ終りて顏に著しき悲の色浮ぶ。微笑もなく、クリスマス木に近づき贈物などをとゝのへ、手にしたる紅薔薇の鉢を置く。

母。こんな事ははじめてだわ。家一杯に贈物が

あつて。男の子の物は何もないなんて！（木に人形を吊す）
私の一番目の子！ 私のたつた一人の男の兒！彼の兒が生れて六日目に彼の兒のためにこの木を飾つたつけ……それから十年になるわ。父さんがあやしたり笑つたりして彼の兒をさしあげたつけ。彼の兒が小つちやな桃色の足で蠟燭を蹴つたつけが、あの時はてつきり火傷をしたと思つたわ。急いでその足にキッス

すると……………あの、まめ柔らかゝつたこと！
（泣きまへのことを思出づる面持にて、他の人形を結ぶ、それは赤坊のキモノを着てゐる）去年だつたわ。ヴヰオリンを買つてやつたのは。『氷靴よかヴヰオリンの方が欲しい』つてあんなに頼んだつけ。もう夢中になつて、終始、彈いてゐたつけが、後にはきつと大音樂家になつたに違ひない。さつと左樣よ。それでもあまりやかましくて、時々、いやになり〳〵したわ。い

つか一度『およし』つて叱つたことがあつたつけが、……今ぢや……好き次第に彈いてゐることだらう。いつでもあれを彈いたわ、

……お城の上の星の子か

南の海の椰子の實か……

あゝ今でもその通り聞えてよ。それから『樂園』、あれも私にはその通り聞えるわ。(第三の人形を結ぶ)坊や、母さんはあなたを可愛がつててよ、私のたつた一人の男の子だつたわねえ。

よその子のように駄々子ぢやなかつたし、草花も大好きだつたが……。花の方でもあの兒を知つてたと見えて……私には育たない草でもあの兒にはよく育つたわ。大へん薔薇を可愛がつたつけ。薔薇は茂つたけれど、花をつけなかつた。花の咲いたのは今度が初めてよ。どうしたらいゝだらう、私には摘めやしないわ(薔薇の上にかゞみてかばひながら)丁度あのヴヰオリンにするやうだ……誰でも觸

つちやいけないことよ(ヴヰオリンをとりあげ。はげしくキッスす、絃は悲しげな音をたてゝる)あら！坊や、お母さんは坊やの氣に入らないやうな事はしなくつてよ。ね、太郎や、お前の好きなのを彈いていゝわ。もう……どんなに喧しくたつて構やしないわ。さッ。小さなテーブルの上へあげてあげますよ、絹の卓掛のうへに、ね。ヴヰオリンにも私達のやうにクリスマスをしてあげますよ。(テーブルを神聖に飾

り、靜かにヴヰオリンを金彩の絹の卓掛の上に置く、二本の蠟燭をおき、火をともす)祭壇のやうだわ。

(嵐ますますたけりて窓を打つ)

少女等の聲。(閉ぢられたるドアの外より)母さん！はいつてもよくつて、はいつてもいゝこと？母さん。

母。父さんが歸つて被來ると入れますよ。父さんを待つてらつしやい。

(嵐の音はげしく鳴りて窓にあたる)

少女等の聲。父さん來やしないわ。何處にいらつしやるの？

母。(氣遣はしげに)ほんとに遲いねえ。まあひどい風になつたこと、(窓のさころへゆき)ひどく吹きつけることねえ、(日覆をあげ、ガラスに迫る闇の中を見やる、嵐窓にあたりて吹ゆ。彼女徐ろにクリスマス木のさころへ歸り來る)早く歸つて下さればいゝが。何だか氣になつて來たわ、何事もなけりやいゝがねえ。……ほんとにこの吹

きつけること雪がひどくなつて來たわ。父さんはあの牧場を横ぎつていらつしやらなきあいゝが、あそこは人通りもなひし、それに風がひどく吹きまくる處だから、(かゞみて薔薇をかばふ)太郎や、お前が居なくつてどうしてクリスマスをしたらいゝか、私困つちまふよ。坊や……太郎や！　お前の父さんは早く歸つて下されば好いのにねえ(ヴヰオリンを置きたるテーブルの側を過ぎて、躊躇する)あら、此處

へおいたと思つたのに。あゝ左樣だ、どうか
してるわ。やつぱり、此處にあつたわ。

(ヴイオリンに觸れる、樂器は長き樂しき音を發す)

少女等。(ドアの外より)父さん。父さんだ。父さん
だよ。(重く雪を踏む足の音、ドアの開く音、閉づる音)
メリー、クリスマス、パパ！

母。あ、歸つていらしつた。(前に進む)

(父入る。風に曝され、雪で眞白になつて居る)

父。心配しただらう、いや一生懸命だつた。實

にひどい風だ。

母。ほんとうにねえ。

(沈默の中に、女、男の腕に凭る。この時、ヴイオリン、高き
うたの如き奇音を發す)

父。(驚き)何だ？　今夜、先刻もこんな音がした
が……私は彼が風の中に彈いてるのをきい
たよ……恰度、牧場を通つてた時だ。

母。(目ざめて)ぢやあ、牧場を通つてらしつた
の？　まあ……風の吹く時には、そこを通

らないやうにつて言つてたのにこんなに困つたことはないわ、でも今…………。

父。馬鹿に遅くなつたから、心配させたくないと思つてね。

母。まあこの濡れたのをお脱ぎなすつちや如何?…………牧場の中で何をあなたはお聞きになつたの?

(露滴るコートをぬがす。ポケットは包で一ぱいになつて居る。二人はそれを取り出し、その中の或物を開

き、木に玩具を掛く、すべて女の子の玩具なり)

少女等。(ドアの外)父さん、母さん、入れて頂戴、入つてもよくつて?

父。おゝあのヴキオリン!薔薇の花!私は男の子なしにクリスマスをしようとは思はなかつたつ、そんな事があらうとは思ひもかけなかつた。今夜、途中でわけがわからなくなつて、道を失つた。

母。(俄に手にすがり)道を失つたんですつて?

あの牧場で？　もう嵐のときに彼處を通つちやいけないわ。

父。ひどく吹きつけてるぢやないか……ひどかつたよ。小半時の間に私の背の高さに積つたからねえ。暗さは暗し路は見えず。そうしてゐるうちに感覺がなくなつて、全く行手がわからなくなつた。私は三年前に彼處で吹雪に逢つて死んだ人を記憶て居る……それあの老人……あれを私は忘れることが出來ない。

母。その人の細君が朝になつて見付けたんでしたつけね。……あなたは、もう彼處を通つちやいけませんよ（縋り付きキッスす）あ、あなたは未だ何を聞いたのか仰言らなかつたわ。

父。私はヴヰオリンを聞いた。

母。（低き調子にて）え、まあ——小供の？

父。あの吹雪の中で道を失つた時、確かに彼子のヴヰオリンを聞いた。

母。（不安らしく）私は何にも聞きませんわ――全く何も。それは私が蠟燭をたてた時に一寸鳴りましたわ――だけどあなた、時々鳴りますの。

父。（なほ嚴かに）お前にはわからなかつたんだらう。私は確かに彼子が嵐の中で彈いてるのを聞いた。私は彼が彈く樂の音の後を追つた。

……牧場をよぎつて……吹雪を冒して……

母。（畏れを帶びたる聲にて）そして彼が道を敎へ

ましたの？

父。（靜に）何物かが私に道を敎へた。そして私はヴヰオリンを聞いた。

母。（熱心に）ヴヰオリンは何を彈いてゝ？

父。南の海の椰子の實か――、といふのを彈いた。

少女等。（ドアの外にて）父さん、母さん、中へ入れてクリスマス木を見せてくれないんなら、こんな扉なんかこわして仕舞つてよ。だつて

私達のクリスマス木なんだわ。

母。もう暫く。ほんの一寸ですからね。

（父、母、ヴヰオリンをおいてある祭壇の如きテーブルに近き、恭しく首を垂れ、手を握りて立つ。ヴヰオリン全く音を立てず）

母。さはつちやいけませんよ、彼の兒のする通りにさせませう。——子供の天分に就いて、親は何を言ふ權利がありませう……あの儘で育てば、あの兒は立派な音樂家になつたん

だらうものを……太郎や！　太郎や！

（彼女はじめて泣く——情こもれる涙。すゝり泣く）

父。あゝ私達は忘れて居た。死んだ子は神樣のもの、生きてる子だけ私達のものだ。さあ、子供達をお呼び、泣顔を見せるものぢやないクリスマスの晩なんかに。

少女等。（ドアの外にて悲しげな聲にて）クリスマスなんか、もう、知らないわ。ちつとも構つてくれないんだもの。

母。（急いで居ずまひを直し）さあ、もう可いわ。おはいりなさい。

（母、ドアを開く）

少女等。（ガヤガヤ言ひながら突入す）父さん、母さん。メリー、クリスマス、ママ!!

母。メリー、クリスマス!

第一の少女。あ、人形! 一つ二つ三つ四つ五つ六つ。

第二の少女。お人形さんの馬車があつてよ。双児が乗つてるわ。

第三の少女。（母の手に縋り）ママア、有難う。

第一の少女。あら、あら、マツフとボアがあつてよ、あたいあれを戴くわ。

第二の少女。人形のお家があるわ。奇麗な窓掛がかゝつてるわ。あたいはあれを戴いてよ。

第三の少女。（静にやさしく）ママ…………太郎さんは何を戴くの?

（母、うるめる眼にあてたる手を伸し、薔薇の枝を折り、

ヴヰオリンの上に泣く。静に）

第三の少女。母さんは太郎さんを記憶て居らつしやるわねえ。

第二の少女。ママ、ママ、あたい橇が欲しいわ、橙なんかいらないわ。

第一の少女。あたいは氷靴がほしいわ。ドロップや林檎なんか何日だつて食べられるんだもの。

（少女等は、にぎやかに笑ひさゞめき、木の廻を跳れ廻

る。ヴヰオリン今発し始むる時の如き低き音す）

母。お聞きなさい（おづ〳〵夫の手に縋り）あなたは何かきこえませんか。

父。聞える。はつきりと。………お前は？　何故そんなに慄えてゐる？

母。まあ何といつたらいゝんでせう。吃驚しましたわ。何にもわるい事はしないつもりですのに。怖いわ。

父。それ、お前はひどく昂奮して居るんだ。何

でもないぢやないか。私は先刻もそれを牧場できいた。……もしそれが彼子だつたら如何する？　お前は太郎が怖いのか。

ヴヰオリン。（緩かに微かに響く。樂の音は、恰も小兒が彈けるものゝ如く、調子外れの小供らしき節あり。漸次にはつきり聞え來る）

南の國の椰子の實か

坊やを抱いたる母が見ぞ……

母。（夫の肩に顔をかくし、少女等に背を向けて立つ。小

女等は母のそぶりに氣付かず）靜に靜に。

ヴヰオリンの聲。

あゝパラダイス、パラダイス！

世界は日々に老ひつゝあり。

暖かき愛の故郷に、何人か

行きて憩ふことを願はざらん。

母。子供達には何も聞えないと見える。

第一の少女。あたいはあのトキ色の繻子で拵へた汽車よ。

第二の少女。（人形を手より落し、當惑したらしく四周を見廻し）嵐が止んだやうだわ。（躊躇ふ。徐ろに人形のところへゆく）

母と父。（互に手を握りつゝ）お聞き、お聞きよ。

母。又聞えるでせう。

父。うむ、はつきり。

母。止みましたか。

父。もう何も聞えない。

母。（慄え聲にて）此方へいらつしやい、早くいら

つしやいまし。（ヴヰオリンを置ける、テーブルに近づく。ヴヰオリンの前の二本の蠟燭は低くさぼつてゐる）あら、あの薔薇は何處へ行つたでせう。薔薇が見えませんわ。

父。子供等がとつたんだらう。

母。誰か太郎さんの薔薇を見なかつたかい？。

第一の少女。（ドロップスを一ぱい頬張つた儘）あたいマシマロは嫌い。教會で戴くお菓子のやうなんだもの。

第二の少女。（人形の着物を脱がしつゝ眼をあけたり閉ぢたりしてよ。

第三の少女。（玩具をおき）いゝえ、かあさんあたいそんな事しないわ――太郎さんの薔薇に觸るやうなことは致しませんわ。母さん、何うして見えなくなつたんでせう。何處へ行つたんでせう。――、父さん。太郎さんは何處へ行つたの。母さん、矢つ張り死んだ子供等と一所にクリスマスをしてるんでせうか。（他の二

人の少女より離れ、優しく進み出で、（おづ／＼母の手に、已の小さき手を置く）あたいには解らないわ。そこに在つた薔薇がないなんて。見えないなんて。

（ヴキオリン、靜かに音を立てる）

少年の靈現はる。扉をも開かず、窓をも動かさず。室を横ぎらんとするものとも見えず。その姿段々に鮮かに見えるやうになる。ヴキオリンのあるテーブルの側に立つ。蠟燭消え

て、何人も靈を見えわかず。世を去りし男の子の姿あり〳〵と現る。手に紅き花を携ふ。これ失はれたる薔薇なり。テーブルの傍を過ぐる時、かゞみてヴヰオリンを撫でる。ヴヰオリン先刻の如く、樂しげなる音を發す。靈は靜かに動きて子供等の間に入り、第三の少女の側に止る。恰も『花ちやん、花ちやん』と話すが如くその唇の動くのが見える。

花子　——第三の少女。（當惑したらしく四周を見て）母さん、どうもしやしなくつて？

少年の靈。（母の方に進み）お〳〵、母さん。

母。（夫を顧みて）妙ですわねえ、何と言つたらいいんでせう。あなたには何か見えませんか…………………何か。

父。何にも見えやしない。

母。私にも何も見えないんですけれども、何だか斯う盲目のやうな氣がしてなりませんわ。何かしら此處に見えなきやならないものが有

るやうな氣がしますの。見えないんですもの。
あゝぢれつたい。
少年の靈。父さん。父さん。
父。（靜然として）否。何も見えやしない。全く何も。
少年の靈。（ちよつとの間、失望したらしく見える、やがて）誰か僕を知つてるだらうと思つてたのに。
（更に元氣よく）よし／＼、構やしない。
（行きてヴヰオリンに觸れる。弓をとりて樂器に頭をあ

て。靜かに）
あゝパラダイス。パラダイス。
母。あ、ヴヰオリンが見えなくなつた。何處へ行つたゝらう。
（少年の靈、微笑して、再びヴヰオリンをおく）
母。あ、今見える。左樣だ……まあ一體どうしたんだらう。妙だねえ。
父。頭痛の加減だよ。
母。（泣きつゝ）私はこれまで隨分泣きましたわ。

少年の靈。（笑ふな止めろ。母の涙を見て、悲しげなる面持にかはる）母さん。

母。（人々より離れて、窓の方へ行き、何物かを聞き澄ますやうに頭を傾け）嵐が止んだわ。風の音も、もう聞えないわ。

少年の靈。聞えるものは母さんのお泣きなさる聲ばかりです。（母と窓との間に立つ。母に觸れんともせず。嘆く）母さん、何にもお泣きなさることはありません。ねえ。……私達はあんなに愉

快な時を持つたちやありませんか。ねえ、母さん。

少女等。（一齊に）メリー、アワー、クリスマス、ママ！

少年の靈。母さん。こゝを御覧なさい……此方……左様……。見えませんか、母さん。（がつかりして）母さんには見えないんだ。ほんとうに見えないんだ。

花子。（母にすり寄つて、靜かに）母さん。薔薇の花が

眞實に見えなくなつてよ。きつと太郎さんが自分のに戴いたのに違ひないわ。ねえ、母さん。

少年の靈、うなづき、にこやかに微笑みて、その方に薔薇を投げる。少女受けそこないて、薔薇床に落つ。少年の靈、それを拾ひ上げて、母の手におかんとする。母の手を開きたる儘にして、花再び床に落つ。)

少年の靈。(薔薇にキッスして、それを母の咽喉に結びつける。再び笑ひつゝ語り出だす)今度こそは見え

るでせう。

母。(頭を廻らし、咽の下に刺のチクチクするのに氣付き、手でさはつて見て)あら、薔薇が此處にあつたわ……………ほんとうにまあ。

花子。(しうれしく)でも彼處には無かつたわねえ。

父。お前が其處へ結んだのに違ひない、そして忘れたんだよ。

母。(頭を振り)いゝえ。確かにそんな事はありませんわ。

父。（厳粛に）ぢや左様ぢやないんだらう。
（少年の絃弓を取り上げる）
ヴヰオリンの聲。
おゝ、パラダイス。パラダイス。
（少年の絃弓をおく、楽の音止む。微笑つて花子の手を取り、二人は他の少女の中に入りて、戯れ初める）
母。どうしても妙ですわねえ……まあ嬉しいこと。どう言つたらいゝんでせうねえ。
父。多分、太郎も嬉しがつてるだらう。たとへ

私達がその嬉しさを何ともいふ事が出來なくとも。
母。全く不思議と不幸とは同じですわねえ。私はもう不幸福ぢやありませんわねえ。あなたにはどんなに私が嬉しいかお解りになりますわね。
少女等。メリー、アワー、クリスマス。メリー、アワー、クリスマス、マムマ。
母。（ほゝゑみつゝ）ほんとうにねえ。

父。（母の手をさり）さあ彼方へ行つて、殘りの包みを開ひて、子供等に遣らうぢやないか。

少女等。まだ木のずつと〳〵上の方に殘つて〳〵よ！

母。（樂しげに）みんなお前達に上げますよ。そこにあるんで、何でも好きな物を上げますよ！

（少年の靈。いたづらして母の咽喉より薔薇を取る。母は身をかゞめてそれを拾はうとする。少年の靈、母の顔が自分の顔の側へ來るを待つて、その頰にキッスする）

母。あゝ！（薔薇にて口をおほひ）太郎や、太郎や！

（少年の靈。子供等と樂しげに戯れ遊ぶ）

花子。ハッピイ、アワー、クリスマス、マムマ！

ハッピイ、アワー、クリスマス。

少年の靈。母さんいらつしやいよ。

―（幕）―

月見草の歌

うつら〱夢みてた。
月見草の花は、
何故に、眼をさました。
月姫様が、
お出になると。
夕の星が知らせた。

[illegible]

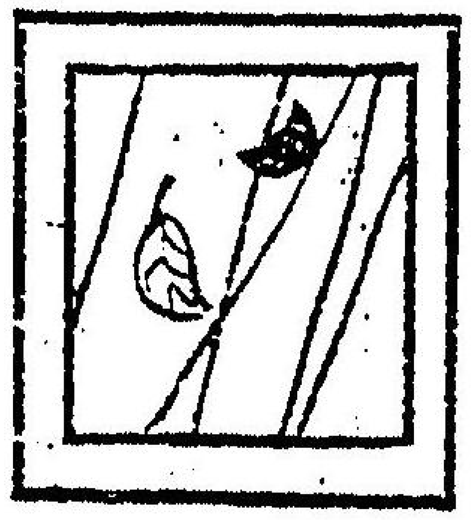
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



さようなら

　學校へゆくと、今日は、見馴れぬ新しい生徒が、冬子の前の席についてゐた。長い美しい鳶色の髪をふつさりとオサゲにした少女でした。

　冬子は自分の席へついて、うつとりとその美しい髪に見入つた。

　少女からあの髪を奪つてしまひたいほどには

思はないけれど、冬子は、何かしら悲しかつた。世の中が暗かつた。

　天國に住む少女のよふに氣高く美しい髪をもつた人があるのに、自分ばかり、見る影もない汚ならしい髪だつたら、ほんとうに、どうしよふ！

　まつたく。冬子の髪はやつと結べるほどしかなかつた。すこしでも飛んだり跳ねたりしよふものなら、鼠の尻尾のよふな髪は、冬子の頭の

うへで踊らずにはゐなかつた。

　この美しい生徒は名までも愛らしい……………星夜といふのでした。

　星夜のキモノはまた珍しいものだつた。ヒフもキモノもひとつ色でした。

　冬子のキモノはまた、お母さんの若い頃の他行を仕立直したもので、茶色でした。帶は黒かつた、それは黒色のお祖母さんのを直したのだつた。みんな地味なものばかりだつたが何れ

も、地質が好くて、昔は美しかつたどいふこと
が、僅かに殘された冬子の誇だつた。
昇降口で冬子は、星夜の帽子とコートとを見た。それも、皆同じ色だつた。何故おなじ色なのだか、その譯が冬子には解らなかつた。

　ともかくもそれは他行のキモノに見えた。星夜さんのお母さんは平常でもあんなキモノを着せるのか知ら？

　放課時間が來ると、他の生徒は星夜を一人殘

して騒ぎながら教室を出て往つた。

　冬子は、星夜のことが何だか氣になるのでやはり席についてゐた。

　年上の生徒の秋子が、チラと冬子の方を見た。それが何故か咎められたよふで、冬子はまじまじと美しい髮を見ながら立上つた。と秋子が憎らしく大きな聲で笑ひ出したので、冬子はその儘また坐りました。

　やがて授業が終へて、生徒はみんな歸つて往

つた。
冬子はまた秋子に笑はれはすまいかと心配ひながら星夜が動かないので自分も席をはなれずゐた。
『あなた早くお歸りなさる方が好いわ。でなきあ敎場へ閉込められて、死ぢまつてよ』
冬子がそう言つたけれど星夜は動かなかつた。
星夜は、俯下いて涙を隱くした。
星夜は、話するのが辛かつた。

星夜は、門の外に乳母が星夜を待つてゐるのを知つてゐた。それを他の生徒に知られるのが恥かしかつた。……今朝學校で大きくなつたらもう乳母と一所に來るのではないと敎へられた。
『あら門のとこに變な婦人がゐてよ』冬子が窓の外を見ながらそう言つた。『早く出ないとあの婦人が打ちに來てよ』
『あたし一所にお家へ歸るのいやなの。ゆかないわ』

冬子は星夜の肩に手をかけてこわ〴〵聞きました。

『あの方、だあれ？』

『あたしの乳母よ』

冬子は眼を見張つて星夜を見た。冬子はつひぞ『バアヤ』といふ名を聞へたことはなかつた。

窓を明けた。バアヤといふ婦人は、上から下までまつ黑なそして上品な裝をしてゐた。

『ぢや他の道を歸りませう』

冬子は足を爪だてゝ靜かに靜かに星夜の手をとつて階段を降りた。

暗い廊架をぬけて裏門へ出た。

『さあ駈けませう。はやく〳〵』

路々、星夜は今伯母と一所に住むでゐることを冬子に話した。

『お母さんは何處にゐらつしやるの？　亡くなつたの？』

『お母さんは外國にゐるの』

『外國』がまた冬子には解らなかつた。然しともかくも星夜とお母さんと一所にゐないといふことだけは解つた。

『誰が髮結ふの？』

不意に大人らしいませた口吻で尋ねると、星夜はやさしく、

『乳母が結つてくれますわ』

『日曜日には誰がお湯へ入れて下さるの？』

『乳母が毎日入れてくれますわ。お醫者樣は子

供は毎日湯に入らぬと好けないつて仰言つたわ』

『まあ毎日！　毎日お入りなさるの？………そしてお母さんが外………外國にゐらつしやる時、誰がお禱して下さるの？』

『あら、何時でも乳母ですわ』

『まあ、お母さんがいらしても？』

冬子には解らないことばかりでした。

『お母さんといふものは、自分で子供のキモノを縫つたり、子供に唱歌を敎へたり、仕事を言

付けたり、復習をして下さるものとばかり思ふてゐた。

お母さんは林檎の木のよふに、茂つた枝を青空に擴げて涼しい木蔭を作り、子供達を日にもあてず樂しく育てあげるものだと考へてゐた。

それだのにお母様は外國へ！　乳母がお隣りをするとは！

多分、乳母はお母様とおなじものだろうとひとりできめてしまつた。

『ぢやその乳母がオアシくれて？』

『いゝえ乳母はくれないわ』

冬子のお母さんは、冬子が惡いことさへしなければ何時でもオアシをくれた。

星夜さんは惡戯つ兒なのかしら？

でも　惡戯娘の髪は延びないといふからそふでもないだろうと思ひ〱家へ歸つた。

次の日。

冬子は星夜に、

『伯母様にオアシを貰つていらつしやいよ』と言ひつけた。

星夜はこの學校へ來はじめて冬子に親切にされたことを思へば、斷ることも出來なかつた。けれど伯父様も伯母様も銅貨なんぞは持つてゐなかつた。いつか料理人が持つてゐたのを思出して、悪いことゝは思ひながら、それをそつと持出して來た。

冬子は小間物店のまへに立つて待つてゐた。

冬子と二人は、二錢から五錢位の正札のついてゐる物を注意深く見渡しました。

『あら、こゝに搖籃があつてよ、でも人形がなくちやだめねえ。人形もこゝにあるけれど、人形だけぢや搖籃も買はなくちやつまらないわ……ね、そうしませう。ブランコを買つておいてこの次に人形を買ひませう………ほんとうに私達が男ならねえ。鐵砲を買つて遊ぶわ。ちよいとあなた、彈丸は一錢に四つよ、好いわねえ